丸岡秀子

ひとすじの道

第二部

偕成社

丸岡秀子

とすしの道

第二部

偕成社

ひとすじの道　第二部

一九八三年四月二五日　一刷発行
一九八三年一二月一日　八刷発行

著　者　丸岡秀子
発行者　今村　廣
発行所　株式会社偕成社
東京都新宿区市ケ谷砂土原町三の五　〒一六二
振替　東京五―一三五二番
電話　販売部（〇三）二六〇―三二二一番（代）
編集部（〇三）二六〇―三二二九番（代）

本文印刷　新興印刷製本株式会社
多色印刷　株式会社　金羊社
製　本　株式会社　常川製本

定価九五〇円

©丸岡秀子　一九八三　Printed in Japan.
ISBN4-03-005050-6
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

目

次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

父と娘のあいだ……7
親友と旧友と……77
芽吹き……124
自立の準備……191

装丁　原　万千子
題字　丸岡　秀子

ひとすじの道

第二部

父と娘のあいだ

「恵子や、ちょっと、ここへおいで」
いつものやわらかな声で、祖母が呼んだ。
「何の用事でやす」
茶の間からいそいで次の部屋に入ると、祖母は仏壇の前に座っていた。その座り方はふつうではなかった。いつも前かがみになりがちな背をシャンとそらして、胸を張り、膝の上には、ふしくれだった大きな両手が、キチンと組まれていた。その手に血管が、いく筋か青黒く浮かんでいるのが見えた。
「何の用でごわす。まあ、おばあさん、まるでお客さんのような格好で……」
恵子は、かなりの間隔をおいて、祖母の前に、祖母とおなじようにキチンと座った。
「あのなあ、あさっては、いよいよ父さんの家へ帰るのだが、そのことについて、ひとこと、お

まえに言っておかなくてはならないことがあるんだよ。
それはなあ、この家の門を出たら、もう決して、こっちをふりむいてはいけないよ。父さんの家では、きっとみんなが、おまえの帰ることを待っているにちがいないから。きっとそうだよ。いまごろは、大さわぎをしているかもしれないよ。考えてみれば、生まれてはじめて、家に帰るようなもんだからなあ。うれしいだろう。
だから、そのことだけを思って、向こうだけをむいて行くんだよ。決してこっちをふりむくんじゃあないよ」
祖母は、おとといの朝、こういった。
恵子は、祖父と別れ、千曲川の橋を渡り、いよいよ、ひとりで父の家へと、ひたむきに歩きはじめたとき、あの日の祖母の姿と、このことばを思い出していた。
「決して、こっちをふりかえってはいけないよ。向こうでは、みんなが大さわぎで待っているよ」
このことばがあったからこそ、これにしがみついて、祖父にも橋のたもとで帰ってもらうことができた。そして祖父の見送りのかわりに、祖母のそのことばを抱きかかえて、歩き出したのだった。
恵子は、肩にかついでいる信玄袋の紐を、もういちどにぎりなおし、足にも力を入れた。小さな下駄が、乾いて白ちゃけた道をふんでカラコロ鳴った。まるで、はげましの歌のように、足は、その音とともに前へ前へと進んだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

父の家までは、これから一時間ほどで着く。そのあいだの街道には、呉服屋、菓子屋、銀行の支店、そして学校などがならんでいる。ここは、一年に一度か二度通るたびに、見てきた街の姿だった。

足を早めてそこを過ぎると、こんどは田畑が開け、田畑の向こうには、こんもりした森も見える。すこし呼吸が楽になったとたん、たんぼのなかの小山が目にとびこんできた。

信濃の遅い春の土は、まだかたく凍っているなかに、去年の秋から稲の実をこいでしまったあとのわら束が、円錐形に積み重ねられて、小さな山になっている。

この小さな山は、佐久平では、〝にゅう〟と呼ばれていた。きょうの〝にゅう〟は、さっき別れてきた常を思わせる。

常と恵子は、中込(なかごみ)の田のなかで、このわら束を使って、工夫をこらし、さまざまな遊び方をしてきた。常はいつも、「家を作ろうよ」といい、一束、一束、わら束を横にならべて床を作り、そのまわりに、こんどはわら束を立てて、かこいを作った。そのなかにふたりの娘は、ちょこなんとしゃがんで、手をつないだこともあった。ふかし芋をかじりながら、ニッコリしたこともあった。

はるか向こうの、山のはざまには、春のうす日がやわらかく洩れて、まだらな日だまりが見える。高い空に枯れ枝だけをつきさしている遠くの森の静かなたたずまい。だが、でこぼこに凍った土の底には、春の芽吹きや、夏のはげしい営みを約束した休息が感じられる。

「さあ、もっと元気を出して」
と、どこからともなく声がかかる。するとまた、恵子の小さな下駄は、カラコロ鳴り出した。この音を何度もくりかえして歩いたこの道。お祭りやお盆に祖父といっしょに歩いたこの道。祖母からたのまれて、父の家にお金を借りに、ひとりで行き来した、緊張の道でもあった。
白壁の土蔵が見えはじめると、恵子の心はふるえてきた。父は、母は、弟や妹は、どんな顔をして待っていてくれるであろう。祖母のほうにふりむきたい心をはげまして、ここまで歩き続けてきた。
ひとりで、小さな舟を漕いできて、その舟からいま降りたったような気持ちで、じっと父の家の門前に立って、大きく深呼吸をした。家に入るまえの準備であった。この家は、きょうからじぶんの家でもある。この家のなかでみんなは、どんなに待っていてくれることだろう。
「太郎ちゃんたちが、跳んで出てくるんじゃあないだろうか」
それにしては、静かすぎはしないだろうか。
門は店の格子戸につながっていた。その格子戸に両手をかけて店のなかをのぞいてみた。すると父がいた。机の前で、帳面をつけている彫りの深い横顔は、墨絵のように暗い部屋にほのかに浮いていた。
恵子はドキドキしながら、あいている戸口から足音をしのばせて入ってみた。そして、父の前に黙ってすっと立った。はじめてこの家での、親と娘の対面である。

「ああ、来たか」といって、父もそこで立ちあがった。その声は平らだったが、顔ははじめて娘を迎え入れるにしては、晴ればれとしていなかった。

「さあ、こっちへあがれ、誰かいたかや。たけさんや、恵子が来たぞよ」

父は奥に向かって声をかけた。

「まあ、恵子さんが！」

ひきつめ髪に、たすきをかけたままの手伝いのたけさんは、大きな四角い前かけで濡れた手をふきながら、いそいで出てきた。

「さあ、さあ、その袋、お渡しなすって。ちょっとお会いしないあいだに、また大きくおなりやしたな。お待ち申しておりやした」

たけさんは、恵子の肩から、信玄袋をはずしてくれ、「さあ、さあ」とニッコリしながら、恵子の先に立って、茶の間に連れていった。恵子とたけさんのうしろから、父は黙ってついてきて座った。そして腕組みをしながら、やはり目は伏せたままで言った。

「ひとりで来たのか」

父は、恵子の顔をまだまともに見ないまま言った。

「はあ、おじいさんがついてくるといいなさったけれど、ことわって、ひとりできやした」

「そうか。ひとりで来たのか。あっちは、みんなお元気だったか」

「はあ、おばあさんも」

泣き別れの場面は話せなかったし、父もそれ以上は聞かなかった。
「あのう、母さんや、太郎ちゃんたちは……」
こんどは、恵子が聞く立場にまわっていた。
「それがなあ、母さんは母さんの実家に用事ができて、そっちへ行っていて留守なんだ」
「ええっ。じゃあ、太郎ちゃんたちも、みんな留守なんでやすか」
恵子は、すぐ伏し目がちになる父の顔を、じぶんの手で持ちあげたいような気持ちで聞いた。
「そうだ。みんな連れてだ。四人とも留守なんだ」
父はきっぱりした口調でいった。
「おばあさんは、父さんの家でみんなが待っているから、元気で行くようにっていわれやした。それなのに、それなのに、どうしてでやす。わしが、きょうくることは、みんな、知っていたはずではごわせんか」
恵子は、じぶんの声がうるんでくるのを、一生懸命こらえようとした。手が、ひざの上でふるえていた。
父は、それに対して返事をしようとはしなかった。腕組みのまま、うつむいたままの姿を変えていなかった。ふたりのあいだに座っていたたけさんは、恵子のほうに向いていった。
「恵子さんのいいなさること、よーくわかりやす。だがなあ、みなさん、二、三日でお帰りなさることになっておりやす。ほんとに急なご用だったもんで、太郎ちゃんは、恵子姉さん、いつ来

るかって、待っておいでやした。……」

たけさんの言い方は、父と娘のあいだをとりなす結びの糸のように思われた。

「たけさん、今夜は、恵子とふたりでこの部屋に寝るからな。ふとんをたのむよ。わしはちょっと用事で出てくるからな」

父は、どこへともいわないで立ちあがった。

「まあ、お待ちなすって、いま、お茶をいれてまいりやす」

あわてて、外出をとめようとするたけさんに、

「お茶はあとでいい」

と、手でおさえながら、店のほうから父は出て行ってしまった。恵子は、この様子はふつうではないと思ったが、どうしてなのか、さっぱりわからなかった。

「たけさん。これ、いったいどういうことなんだろう。おばあさんは別れるときに、わしにいったよ。おばあさんのうちをふりむいてはいけない。父さんの家では、大さわぎをしておまえを待っている。だから、そっちだけ向いて元気に歩いてゆけって。

それを信じて、みんなの喜んでくれる顔を想像しながら歩いてきたんだよ。それなのに、それなのに、たけさん、これ、どういうことなんだえ」

恵子は、ほっぺたを撲(は)りつけられたような痛さと、深い淵をのぞきこむような疑いとで、たけさんを見ていた。こんな場面に、いきなりぶつかるとは思いもかけないことだった。

母が、この日、子どもたちを連れて里帰りをしているところへ、帰ってきたということは、まったく偶然のことだったのだろうか。そしていま、父は父で恵子の顔を見るなり、すぐ外出してしまったということは、どういうことだったのだろうか。

「ああ、やっぱり、帰るところではなかった。誰も待っていてはくれなかった。それなのに。おばあさんはひどい。おじいさんもひどい。みんな、みんなひどい。みんなで嘘をついている」

恵子はいきなりたけさんにしがみつき、その膝に頭をのせて、泣き出していた。けさは、祖母との別れで泣き、いまは、たけさんに迎えられて、その膝にうつぶして泣く。

「たけさん、わしはいったい何なのかしら。どこへゆけばいいのかしら。こんなことでは、行く先のない子どもじゃない。そう思わない？　たけさん」

地だんだ踏んでもたりない思いで、涙を流し、鼻水をたらしたまま、たけさんの顔を見あげた恵子の顔は、この人に救いを求めている悲しみにまみれたものだった。

「恵子さん、よーくわかりやす。お泣きなすって、わしも泣きとうごわす。おかわいそうでなりやせん。だがなあ。おとなの世界には、いろいろのことがあるもんでごわす」

たけさんは、恵子を抱きしめ、背中をさすっていた。その手は勝手仕事で荒れていたが、そのてのひらで撫でてもらう恵子の背中は、あたたかかった。

そこへ父は帰ってきた。目鼻だちのととのった背の高い男ざかりの父は、恵子とたけさんを見おろして立っていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com